

令和元年6月18日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01751

研究課題名（和文）デジタルネイティブのネット上の対人関係スキルを育成するための基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research for developing digital native generations' interpersonal relations skills in the online networks

研究代表者

石川 真（Ishikawa, Makoto）

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：60318813

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：デジタルネイティブと呼ばれる現代の子供や青年のネットワーク上の他者との相互作用過程におけるより良い関係、望ましい関係を築くための対人関係スキルを育成するための基礎的研究を行った。ネット上のトラブル対処や実際のコミュニケーションの傾向を探り、社会的スキルやコミュニケーションスキルなどを高めることがネット上の良好な対人関係を築く重要な側面であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学校教育においては情報モラル教育が重要視されているが、ネット上の課題という捉え方での取り組みにとどまる傾向が強い。本研究の成果より、実社会における対人関係に関わる社会的スキルやコミュニケーションスキルがネット上の対人関係にも関連が深いという点は、学術的意義があると同時に、この傾向を指導の一つに組み込むことで、これまで以上に情報モラル教育の成果が期待されると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to explore the tendency of digital native generations to interact in online networks. Especially it was focused on the characteristics of skills required to build better and desirable interpersonal relationships. It was shown social skills' level was related to coping adequately with troubles in online networks. Groups with higher social skills reported better online communication skills than groups with lower social skills. In addition, groups with higher basic skills reported better online communication skills than groups with lower basic skills. Groups with higher communication skills demonstrated better communication behavior than those with lower communication skills. It was shown that enhancing social skills and communication skills was an important aspect for establishing good interpersonal relationships on the online networks.

研究分野：教育工学

キーワード：コミュニケーション ネットワーク 社会的スキル コミュニケーションスキル

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

これからの社会に求められる能力の概念については、数多く提唱されている。たとえば、ATC21s プロジェクトでは、21世紀型スキルとして、情報リテラシー、コミュニケーション、コラボレーション等の能力を提唱している。また、OECDのDeSeCoプロジェクトでは、テクノロジーを相互作用的に用いるスキル、異質な人々からなる集団で相互に関わり合う能力等を挙げている。

ところで、Prensky(2001)はインターネットやコンピュータ等のデジタル機器に生まれながらに接してきた若年層をデジタルネイティブ世代と呼び、彼らは従来とは物事の捉え方、興味関心、ニーズが大きく変わっている点を指摘している。その上で、デジタルネイティブ世代には、テクノロジーを活用した他者との相互作用過程を中心とするパートナー方式(partnering)が効果的な教育方法として提案している。このようなデジタルネイティブ世代に対して、これからの社会に求められる能力を育成する上で、次のような課題が挙げられる。

デジタルネイティブの間に広まっているネットワーク上のいじめ(cyber bullying)の問題は、学習指導要領において情報モラル教育の重要性が指摘されている通り、適切な対応がなされている状況と推察されるが、必ずしも十分な指導が行われているとは言えない。これらのネット上の問題に対する指導・対策内容は、Sproull and Kiesler(1986)の主張するキューレスネスモデル(手がかりの欠如モデル)に基づくものであり、「相手が見えないこと」を起因とする問題に対する解決に偏重している傾向が強い。しかし、SIDEモデル(Reicher,1984)に基づけば、集団の規範から逸脱することが問題発生の最大の要因である。つまり、「集団とのより良い関わり方」「他者(集団)との望ましい相互作用過程」についても検討することが問題を解決する重要な鍵であると考えられる。

2. 研究の目的

デジタルネイティブと呼ばれる現代の子供や青年は、デジタルツールを用いてネットワーク上で他者との関わりを日常的に行っている。これからの社会に求められる新たな資質・能力を育成するためには、このような子供たちの実態を把握し、教育方法や学び方の支援における既存の概念の転換が求められる。とりわけ、デジタルネイティブの他者との相互作用過程におけるより良い関係、望ましい関係を築くためのスキル(対人関係スキル)については、既存の概念の転換を踏まえた新たなアプローチに基づいて育成することがきわめて重要であると考えられる。一方、ネットワーク上の問題の対処には、従来の指導・対策内容(既存の概念)に偏重せず、SIDEモデルで注目している他者との相互作用過程に焦点を当て、デジタルネイティブのネットワーク上の行動や認知的側面の傾向を探ることが重要であると考えられる。

そこで本研究では、これからの社会の変化に対応した資質・能力の中でも、とりわけネットワーク上(以下、ネット上)の他者との相互作用過程におけるより良い関係、望ましい関係を築くためのスキル(対人関係スキル)を育成する学習プログラム開発に向けた基礎的研究を行うことを目的とする。子供たちのネット上での他者との関わり方について、行動や認知的側面の特徴を探り、デジタルネイティブに効果的な新しいアプローチによりネット上の対人関係スキルの育成のための手立てを探るために、以下の(1)~(3)の調査研究を行い、それらの結果を踏まえて(4)ルーブリックの作成を試みる。

- (1) 社会的スキルやコミュニケーションスキルが他者とのネット上のトラブル対処とどのような関連があるかその傾向を探る。
- (2) 対人関係スキルにおいて最も重要と考えられるネット上のコミュニケーションスキル尺度の作成を試み、社会的スキルや基本スキルとの関連性を探る。
- (3) 日頃のネット上におけるコミュニケーション行動(現実のコミュニケーション行動)の傾向を明らかとした上で、理想のネット上のコミュニケーション行動(理想のコミュニケーション行動)に関わる認識との相違について、社会的スキルやコミュニケーションスキルの側面から探る。
- (4) ネット上の対人関係スキルの育成のための学習プログラムを支える評価基準となるルーブリックを試作し、従来のスキル尺度との比較検討を行う。

3. 研究の方法

- (1) 社会的スキル尺度(菊池,1988)、およびネット上の感情等(喜び、怒り、悲しみ、楽しさ、共感、感謝)に関するコミュニケーションの伝達と読解に関する項目(感情表現ごとに4項目)、ネット上のトラブル3事例(C1:個人情報漏洩、C2:炎上、C3:迷惑行為)に関わる被害者、加害者の立場における対処について質問紙調査を実施した。大学生、大学院生計154名を対象とした。
- (2) 社会的スキル尺度(菊池,1988)、基本スキル尺度(ENDE2)(堀毛(1994))、および堀毛(1994)の尺度を参考として作成したネット上のコミュニケーションスキル尺度(18項目、5件法)等を用いた質問紙調査を実施した。大学生、大学院生計158名を対象とした。
- (3) 社会的スキル尺度(菊池,1988)、コミュニケーションスキルに関する尺度(ENDCOREs)(藤本・大坊,2007)、日頃のテキストメッセージサービス利用時における現実のコミュニケーション行動尺度(16項目、5件法)および望ましいと考える理想のコミュニケーション行動(尺度は現実のコミュニケーション尺度と同一)等を用いた質問紙調査を実施した。大

学生、大学院生計 164 名を対象とした。

- (4) 試作した対人関係スキルの到達目標を示したループリックの 6 観点, 4 評価基準の評定と社会的スキル尺度(菊池, 1988)等を用いた質問紙調査を実施した。大学生(学部 1 年生)39 名を対象とした。

4. 研究成果

(1) ネット上のトラブル対処と社会的スキル・コミュニケーションスキルとの関連性の成果

社会的スキルとネット上のトラブル 3 事例の対処との関連について, 社会的スキル全体を独立変数, 各事例の対処の可・不可を従属変数として変数増減法によるロジスティック回帰分析を行った。社会的スキル全体とネット上のトラブル対処との関連は, いずれのトラブル事例, および被害者, 加害者双方の立場においても, 有意であった ($p < .01$) (図 1 参照)。さらに, オッズ比が 1.80 以上であり, 社会的スキルの高い者の方が対処できる(対処できた)と捉えている傾向が強いことが明らかとなった。これらの結果より, ネット上のトラブルを対処する上で, 社会的スキルの役割は重要であると考えられる。

本研究では対面に比べてネット上のメッセージに対する読解力や伝達力の程度を測定する尺度をコミュニケーションスキルと位置づけて分析した。コミュニケーションスキルとネット上のトラブル対処との関連について, コミュニケーションスキル全体を独立変数, 各事例の対処の可・不可を従属変数として変数増減法によるロジスティック回帰分析を行った。コミュニケーションスキル全体とネット上のトラブル対処との関連は, いずれのトラブル事例, および被害者, 加害者双方の立場においても, 有意であった ($p < .05$) (図 2 参照)。さらに, オッズ比が 1.63 以上であり, コミュニケーションスキルが高い者の方が対処できる(対処できた)と捉えている傾向が強かった。このことより, ネット上のトラブル対処にコミュニケーションスキルは重要な役割を果たすと考えられる。

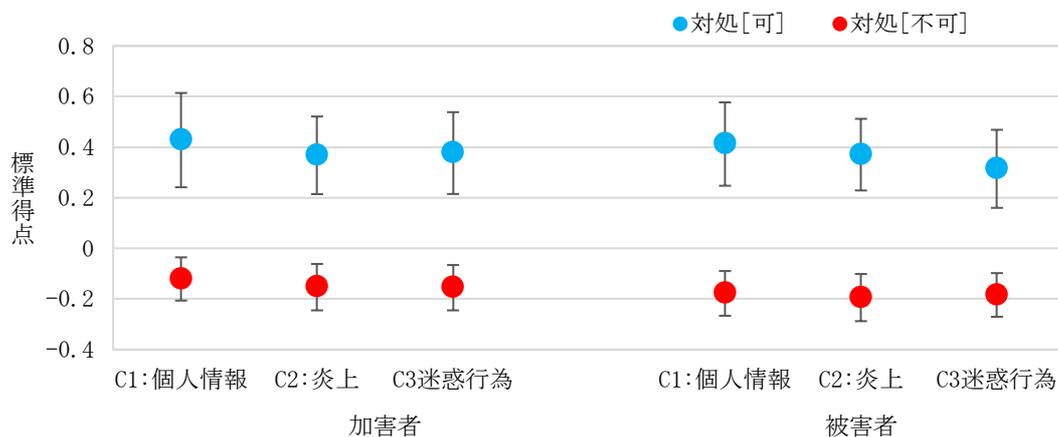


図 1 各立場におけるトラブル対処の可・不可の社会的スキルの傾向
エラーバーは標準誤差を示す

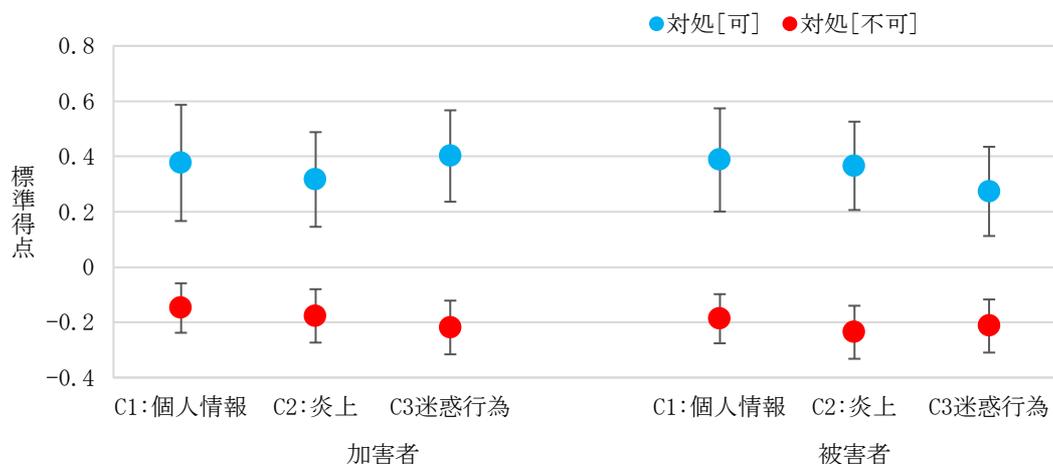


図 2 各立場におけるトラブル対処の可・不可のコミュニケーションスキルの傾向
エラーバーは標準誤差を示す

(2) ネット上のコミュニケーションスキル測定尺度の作成に関する成果

新規に作成したネット上のコミュニケーションスキル尺度は, 信頼性係数(クロンバックの α 係数)は $\alpha = .83$ であり, 内的整合性は比較的高かった。全 18 項目による因子分析(最尤法, 固

有値1.0以上の5因子を抽出、バリマックス回転、回帰法による因子得点の推定)を行った結果、第5因子までの累積寄与率は50.86%であった。因子負荷量の高い項目内容を参考とし、第I因子を解読、第II因子を記号化、第III因子を感情的表出、第IV因子を推察、第V因子を非文字表現と命名した。

基本スキル(ENDE2)とネット上のコミュニケーションスキルの関連性を検討した。ENDE2の平均以上の者を基本スキル上位群(EH群)、平均未満の者を基本スキル下位群(EL群)とし、ネット上のコミュニケーションスキル全項目の平均についてt検定を行った。その結果、EH群の方がEL群よりも有意に高かった($t(158)=2.58, p<.05, d=.41$)。つづいて、ネット上のコミュニケーションスキルの因子ごとにt検定を行った結果(図3(a)参照)、第I因子においてEH群がEL群よりも有意に高く($t(158)=2.22, p<.05, d=.35$)、第IV、V因子においてEH群がEL群よりも高い有意傾向が示された(IV: $t(158)=1.96, p<.10, d=.31$ / V: $t(158)=1.74, p<.10, d=.28$)。以上より、第I因子(解読)、第IV因子(推察)、第V因子(非文字表現)については、通常のコミュニケーションスキルの高い者は低い者に比べて、ネット上のコミュニケーションを円滑に行えると考えられる。

社会的スキルとネット上のコミュニケーションスキルの関連性について検討した。社会的スキルの平均以上の者を社会的スキル上位群(SSH群)、平均未満の者を社会的スキル下位群(SSL群)とし、ネット上のコミュニケーションスキル全項目の平均についてt検定を行った結果、SSH群の方がSSL群よりも有意に高かった($t(158)=2.81, p<.01, d=.45$)。以上の結果より、ネット上のコミュニケーションスキル尺度は、ネット上の対人関係に関わるスキルを測定する上で、ある程度妥当性があると考えられる。さらに、ネット上のコミュニケーションスキルの因子ごとにt検定を行った結果(図3(b)参照)、第I、IV因子においてSSH群がSSL群よりも有意に高かった(I: $t(158)=2.08, p<.05, d=.33$ / IV: $t(158)=2.28, p<.05, d=.36$)。社会的スキルはコミュニケーションスキルに多大な影響を及ぼす側面であると考えられるが、今回は第I因子(解読)、第IV因子(推察)において、社会的スキルの高い者の方が円滑にネット上のコミュニケーションを行える傾向が示された。この解読と推察の各因子の主たる要素は、コミュニケーションにおける受け手(受信者)としてのスキルの側面と考えられる。

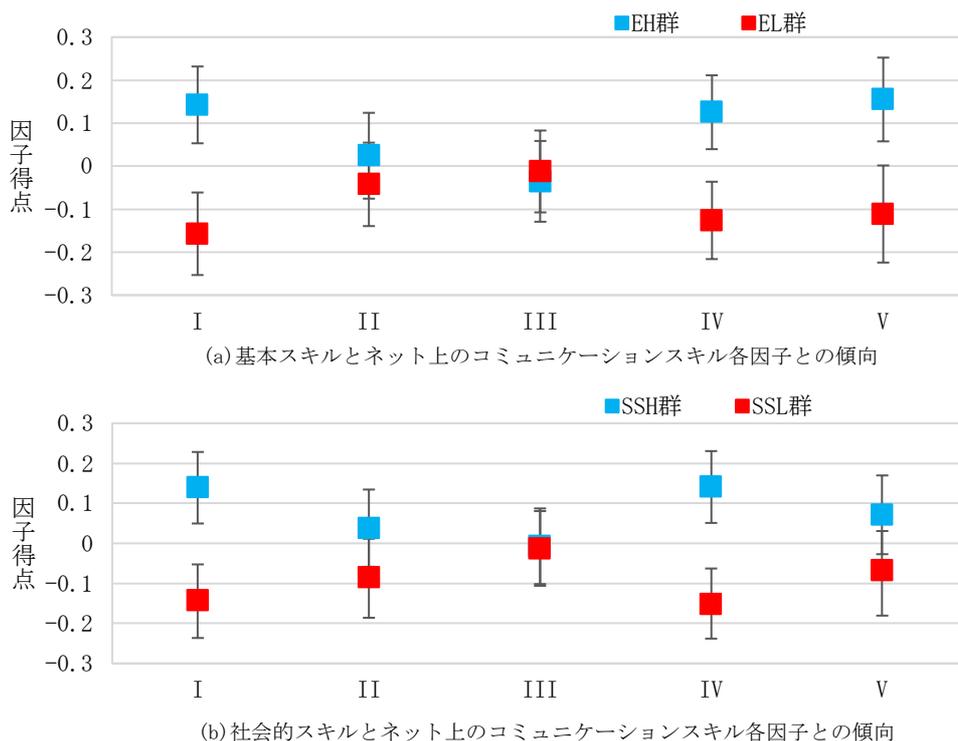


図3 ネット上のコミュニケーションスキルの各因子の傾向
エラーバーは標準誤差を示す

(3) ネット上のコミュニケーション行動における現実と理想の差異に関する成果

現実のコミュニケーション行動の傾向は、分析の結果、3因子抽出された。いずれの因子においても、コミュニケーションスキルが高い者ほど現実のコミュニケーション行動がより望ましい傾向であることが明らかとなった。また、社会的スキルにおいても概ね同様の傾向が示された。

現実と理想のコミュニケーション行動を比較したところ、いずれの因子においても理想のコミュニケーション行動は、現実のコミュニケーション行動よりもより良い行動を望んでいる傾向が示された。限定的ではあったものの、社会的スキルが高い者の方が低い者よりもより理想的なコミュニケーション行動を望んでいることが示された。コミュニケーションスキルにおいては、全般的な傾向としてスキルの高い者の方が低い者よりもより理想的なコミュニケーション

行動を望んでいる傾向が明らかとなった。これらのことより、社会的スキルやコミュニケーションスキルは現実、理想のコミュニケーション行動のいずれに対しても影響を及ぼすと考えられる。このような傾向を踏まえ、他者とのより良好な関係を構築、維持するための振る舞いを改善することで、より望ましいコミュニケーション行動につながる可能性があると考えられる。

(4) ネット上の対人関係スキルの育成のための手立ての検討の成果

(1)～(3)の研究成果において、ネット上の望ましい対人関係を築くためには、育成すべきスキルが社会的スキルやネット上のコミュニケーションスキルであることが示唆された。これらの点を踏まえ、学習プログラム開発のための評価基準となるルーブリックを作成した。評価規準は、表現力、自己主張、読み取り、他者理解、感情制御、他者との関係調整の6つの観点を育成すべきスキルとして示した。また、各観点の評価基準については、大学生向けに4段階、Sを最高到達基準とし、以下、A, B, Cのレベルで示した。

今回の大学生を対象とした各観点および基準の傾向は表1の通りであった。観点によりばらつきが見られるものの、S, A 評価の占める割合が多い傾向を示した。このことより、成人に求められる評価基準として活用できる可能性が示唆される。つづいて、これらの観点の基準と社会的スキル尺度との関連性について、各観点の各評価基準に該当する対象者の社会的スキル尺度の中央値を求めた。その結果が表2の通りであり、自己主張、他者理解、感情制御、他者との関係調整の4観点において関連性が示された。

以上より、ネット上の対人関係スキルを育成する学習プログラムの開発に向けて、信頼性のある評価基準となるルーブリックを示したと考えられる。今後は、ルーブリックの信頼性、妥当性をさらに高めるために、評価項目や評価基準を再検討していくことが課題である。

表1 ルーブリックの評価傾向

	表現力	自己主張	読み取り	他者理解	感情制御	他者との関係調整
S	10	4	13	16	13	14
A	22	22	21	22	21	18
B	7	11	4	1	5	7
C	0	2	1	0	0	0

表2 ルーブリックの評価・観点別の社会的スキル尺度(中央値)の傾向

	表現力	自己主張	読み取り	他者理解	感情制御	他者との関係調整
S	3.42	3.78	3.50	3.53	3.61	3.58
A	3.44	3.47	3.33	3.33	3.33	3.44
B	3.17	3.22	3.42	3.33 ^{※1}	3.22	3.22
C		2.89 ^{※1}	2.17 ^{※1}			

※1 該当数が1-2名である。

文献

- 藤本学・大坊郁夫(2007) コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究, 15(3), 347-361.
- 堀毛一也(1994) 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル. 実験社会心理学研究, 34(2), 116-128.
- 菊池章夫(1988) 『思いやりを科学する:向社会的行動の心理とスキル』. 川島書店.
- Prensky, M.(2001) Digital natives, digital immigrants part 1. On the horizon, 9(5), 1-6.
- Reicher, S. D.(1984) Social influence in the crowd: Attitudinal and behavioural effects of de-individuation in conditions of high and low group salience. British Journal of Social Psychology, 23(4), 341-350.
- Sproull, L., & Kiesler, S.(1986) Reducing social context cues: Electronic mail in organizational communication. Management science, 32(11), 1492-1512.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 石川真, ネット上のコミュニケーション行動における現実と理想の差異, 上越教育大学研究紀要, 査読無, 38(2), 217-226, 2019.
- ② 石川真, オンライン上の情報発信の社会規範意識に関する研究, 上越教育大学研究紀要, 査読無, 38(1), 1-10, 2018.
- ③ 石川真, オンライン上の情報発信に着目したコミュニケーションスキルに関する研究, 上越教育大学研究紀要, 査読無, 37(2), 323-332, 2018.
- ④ 石川真, ネット上における規範意識と振る舞いに関する研究, 上越教育大学研究紀要, 査読無, 37(1), 1-10, 2017.

- ⑤ 石川真, ネット上のトラブルを対処するための社会的スキルの傾向に関する研究, 上越教育大学研究紀要, 査読無, 36(2), 285-294, 2017.

〔学会発表〕(計6件)

- ① 石川真・平田乃美, オンライン上のコミュニケーション行動における理想と現実の相違, 日本社会心理学会第59回大会, 2018.
- ② 石川真・平田乃美, ネット上の情報発信に関わる規範意識と社会的スキルの関連性, 日本社会心理学会第58回大会, 2017.
- ③ 石川真・平田乃美, 社会的スキルとオンライン上のコミュニケーションスキルの関連性, 日本教育心理学会第59回総会, 2017.
- ④ 石川真・平田乃美, 大学生のネット上のコミュニケーションスキルの傾向, 日本心理学会第81回大会, 2017.
- ⑤ 石川真・平田乃美, コミュニケーションスキルとネット上のトラブル対処の関連性, 日本教育心理学会第58回総会, 2016.
- ⑥ 石川真・平田乃美, 社会的スキルの違いがネット上のトラブル対処に及ぼす影響, 日本社会心理学会第57回大会, 2016.

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：平田 乃美

ローマ字氏名：(Hirata, sonomi)

所属研究機関名：白鷗大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：20308224

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。